

フィンランドは NATO 加盟を悔やむか？—皆が

冷静になったとき

<https://www.rt.com/news/574410-finland-may-come-regret/>

RT

April 9, 2023

ヘルシンキの、米主導によるこのブロックへの加入は、30 年も遅れた「冷戦」の美辞を取り入れたものである——フョードル・ルキアーノフ

Fyodor Lukyanov は *Global Affairs* のロシアの編集主任、外交・防衛指針についての *Presidium of the Council* 議長、ヴァルダイ国際討論クラブの研究ディレクター

結局フィンランドは、公式に、NATO の 31 番目のメンバーになった。この国は隣国スウェーデンと一緒に、この軍事ブロックに加盟する予定だった。しかしストックホルム（スウェーデン）は、これまでのところ、トルコが（NATO に）非寛容な態度を取っているために躊躇している。もちろん、やがては加入するだろう。

この拡大は初めてのことでない（NATO は冷戦以来、倍の大きさになっている）。しかしこれは重要な意味を持つ。ロシアと米主導のこのブロックの間の直接の接触は、フィンランドとロシアの国境線が長いために、現在では倍増している。しかしそれがポイントではない。スウェーデンとフィンランドは、原則として中立の方針——あるいは最近の数十年、よく使われた言葉でいえば——**同盟かつ不参加**の立場を貫いた代表的な国家である。

その背景は異なっている。しかし、軍事ブロックからの切り離しを、公的に貫くという関係は、数十年、強固なままだった。（フィンランドは数十年、スウェーデンは数世紀も。）両国の立場は、そのロシアとの関係と、その観点での、彼ら独自の安全保障の考え方の理解によって、形成された。ざっくり言うならば、もしあなたが巨人の隣に住むならば、彼を不安にさせるようなことは、しないのが上策なのだ。スウェーデンの中立は、19 世紀初めのヨーロッパの大国の分裂から、始まっている。フィンランドでは、この立場は、第 2 次大戦の結果につながっている。1930 年代と 40 年代の、フィンランドとソ連邦の厄介な関係は、フィンランドの指導者たちの際立った巧妙さとして、よく知られている。彼らは

彼らの自由と行動の、ある制限を受け入れた。それは軍事的な、そして一部は、政治的な意味における中立だった。

その見返りに、ヘルシンキ（フィンランド）は、主権を確保しただけでなく、市場経済と民主主義制度を手に入れた。特別の、そして高度に利益のある、モスクワとのビジネス関係は言うに及ばず。

1940年代後半から1990年代初めまで、ソ連-フィンランド関係は、異なった社会・政治的見方をもつ国家間の、実りある妥協のモデルとなった。

ある者たちは、悪口である「フィンランド化」——より強い隣人への主権の譲渡——という言葉を使ったが、現実的にはこの現状維持はうまくいった。この国は政治的西側の一部となった。

USSRの崩壊は、この特別の関係の期間を終わらせた。それは1990年代前半のフィンランドに、深い経済危機を起こさせたが、この国の政治的制限から、自らを解放させることになった。ヘルシンキは、モスクワのご機嫌を気遣う必要がなくなり、ヨーロッパ連合に加わった。

ロシア自体は、西ヨーロッパとの（融合ともいえる）特別の関係を築くように努め、フィンランドは自然にそのパートナーになった。2010年代後半に達成された、経済的で人道主義的な協力の密度の濃さは、国境を超える協調のモデルとなった。

非同盟という政策を放棄しようという考えは、常にフィンランドには存在し、それは賢明ではないという、公的で政治的なコンセンサスがあった。実際、30年間、ヨーロッパにおける新しい軍事的対立という考えは、最も頑固な「冷戦戦闘家」Cold-Warriorsの遺物であり、NATOの拡大でさえ、政治的なイデオロギーの意味で言われるもので、軍事的な意味ではなかった。

戦争の現実性が戻ったことで、ヨーロッパ全土が怯えた。スウェーデンとフィンランドでは、非同盟を棄ててNATOに加入するという決断が、直ちになされ、一般の意見が逆立ちすることになった。特筆すべきは、中立の立場がより信頼できる、確かな国の安全保障の方法かどうかを、ほとんど誰も議論しなかったことである。軍事ブロックに加入することが、唯一のオプションと見なされた。それ以前には、非加盟が長い間、最も賢明なやり方と考えられていた。いったい、どうしてこれが突然、変化したのか？

これにはいくつかの理由があるが、一つ特別に強調すべきものがある。「安全保障化」 securitization という言葉があり、これは安全保障という次元が、すべてのもの——経済的、文化的、人道主義的なプロセスさえ含む、すべてに与えられているということである。ところが今そこに、反経験的なものが生じ、それは価値を基本とする形で、古典的な安全保障の問題として起っている。

それは、特別なイデオロギーや倫理的グループに属し、他者に公然と反対するものとして、他者との反目というより、自己防衛のより効果的な方法と考えられている。これは軍事-技術的現象というより、心理学的なものである。

簡単に言えば、(強力な社会に属する) 安全保障を求める感覚は、(戦場で標的になるというような) 危険を避ける現実的な考慮を、超越するものである。

これは、それ自体、西側で起こった価値の過激化 radicalization の結果であり、「**歴史の正しい側**」が勝利したとき、冷戦の後からくる**幸福感** euphoria の波の一部として起こったものである。

したがって、中立を拒否し、同じ道徳的・倫理的ボートに乗っていない者たちを根拠に、「間違った」側の心配を考慮すべきだ、という話は信用できない。

現行の中立の態度は、2つの同時的な概念〈長い平和〉と〈歴史の終わり〉の産物である。前者は、微妙なバランスとか、安全の保障とかいうものは、もはや意味がないからであり、後者は、歴史的真理がどちらの側にあるかは明かで、「地獄行きの」反対側の代弁者といちゃつく必要はないという信念からきている。

両方の見方ともすでに過去のものである。よく考え直す必要がある。

[訳者 Greatchain 注]

論者は、中立ということがあり得ないかのように、どのブロックにつくかを迷う時代ではなくなった、時代は大きく変わった、と言っている。彼はフィンランドとスウェーデンについて論じているが、この2国は、恐ろしい隣の大国ソ連のイメージが刷り込まれているから、判断は難しく、わが国とは比較にならないだろう。わが国の政府やメディアは、国家のあり方を変えよと主張しているロシアを、嘘つきだと信じて(防衛でなく)攻撃態勢を固めている。これは世界の目覚めた、あるいは目覚め始めた国々には、愚かで頑迷で邪悪な国と映るに違いない。

この論文の最後の（やや読みにくい）数節が特に重要である。論者が「歴史の正しい側」というとき、国家の倫理・道徳のことを言っている。国家の運命は力で決まるのではない、道を外した国家に未来はないということである。わが国の世論の大勢は、国家に倫理も道徳もない、つまり善悪など存在しないという前提で動いている。ルキアーノフはそうは考えない。悪の側は宿命として滅びていくのだから、そんなものを支援するのは間違いだと言っている。わが国はまさに、その間違ったことをやっている。バイデン側（NWO、グローバリスト陰謀団、Deep State）が悪の集団であることを、知らないか無視するだけでなく、彼らに忠実に従っていれば何とか道は開けるだろう、と考えているように見える。これが世界各国の笑い者にならないわけがない。